

2013年1月10日

上野真城子関西学院大学総合政策学部最終講義

## The Final Lecture of Dr/Prof. Makiko Ueno

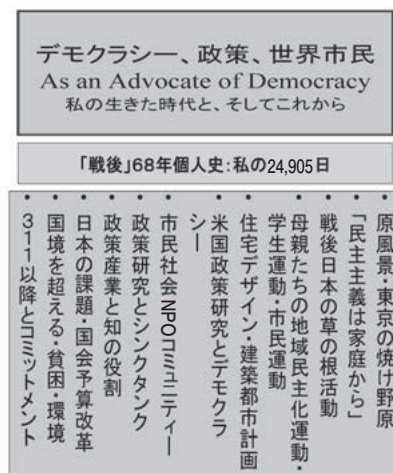
上野 真城子

Makiko Ueno

The following is a summary of Prof. Makiko Ueno's retirement lecture, January 10, 2013 at the School of Policy Studies, Kwansei Gakuin University.

Dr. Ueno talked about three issues: first, her personal history reflecting on Japanese society after WWII; second, encountering American Democracy over the course of 20 years working in the US, observing nonprofits and civil society, and learning the importance of policy research and academic contributions to democracy; and finally, creating her new motto: Think and Act Globally. She thinks of retirement as the commencement of life as a senior citizen working for the world. She will continue to be an advocate of democracy.

2005年4月より2013年3月までの8年間、関西学院大学総合政策学部で教育に携わる機会を与えられたことを心から感謝し、今、大学および、日本を去るにあたっていくつか伝えたいことを話させていただきます。



今日の講義の中では、おもに3つのことで述べてみるつもりです。ひとつは私の生い立ちから、若き日に私が何に関心を持ったのか、二つ目には、私が専門家として、社会に関与し貢献しようとしてきたことは何か、最後に、関学で教育という天与の職をいただき、私が心がけてきたことが関学のモットーとしての、世界市民の育成ということに重なり、その一部でも、次代をになう若者に伝えたいと思ったことをまとめてみます。

## 1. 民主主義とデモクラシー： 私の生き方の源にあるもの

### 原風景・東京の焼け野原から

私は、「戦後」と言うべきかわからないですけれども、68年、たぶん2万4905日を生き続けてきました。その2万4905日、何をしてきたのかということを経験の講義にあたって少し整理しました。というのも、戦前から戦後の日本を生き、時代に関わった人々、我が父母はもとより、兄姉たちが、今、去り逝くので、私があった人たちと時代を次の人たちに伝えておくのも、最後の役割であろうかと思うので、ちょっと長くなりますが、聞いてください。

私は1944年の10月、第2次大戦の末期、東京で生まれました。栄養失調の、お風呂で浮くような赤ん坊であったようですが、生まれて1ヵ月後、東京空襲が始まり防空壕に入って生き延びたのですが、意外に生命力のあったこともであったのかもしれない。そして終戦からの昭和という時代をずっと見てきたということになります。私の原風景と言うべきものは、4歳ぐらいからの東京の山の手、目白にあります。これが私の記憶の早いころのものです。このブランコにのっているのが私でございます(笑)。

今みたいに憎たらしいことを言わない、とても可愛い、いい子でした(笑)。目白の焼け野原で、池袋が見渡せて、西武線が通っていて、線路の先に夕日が落ちるといような原っぱの中の戦後のバラックというか、小さな家でした。その後、周辺は住宅地となり、いわば典型的な都市の中産階級の成長とともに育ったことになります。

### 私の家族：父のこと

その原風景をかたちづくる、家族と住まいというものが、私にとって重要な意味を持っていると思っています。私は宗像誠也という戦後の日本

の、民主主義と教育に多少の影響を持った教育学者の娘として育ちました。50年代後半から60年代には、闘う進歩的文化人と言われ、保守右翼から叩かれた、東京大学教授でした。

この父の父、私の祖父にあたる人間は、柔道の創設者であった嘉納治五郎を師と仰ぎ、その薫陶を得て、柔道の精神の啓蒙と教育を担当して、大正、昭和と、その普及に力を尽くした人間です。

昭和に入って、それこそ柔道ですから、日本のナショナリズムと関係があるのですけれども、教育勅語をうたって、「国のために体を鍛えよ」という精神修養を徹底していたようです。その中で父は堅苦しい教育を受けながら、東大で教育学に進みます。

そして自分としては自由主義の、科学主義に則った教育を目指しながら、戦時国家体制と国体思想の蔓延する過程で、国家権力が、自由主義思想の人間を牢獄に引っ張っていく時代を見ながら、そして戦争への恐怖を覚えながら、戦争反対を言い続けることはできなくて、天皇のご真影を白手袋をはめて拝みながら、教育勅語を朗詠することで、戦争加担していきます。敗戦と、戦後の新憲法は、父にとって、真に喜びであったのです。平和というものの大事さと、国家権力が公教育を侵してはいけないという信念を持って、平和教育と民主主義教育をめざします。

その基本には、戦争の非人間性、平和の大事さ、人権の確立をどうはかるかということに命がけで立ち向かったということだと思います。憲法制定のあとも、しかし日本はいわば「国体」の保持に基づく、ナショナリズムを絶えることない潮流として、国家、特に文部省においては、公教育への関与を始めます。

そこで大きなさまざまな問題が起こります。日本の教育現場が荒れすさむのが1950年代、1960年代です。その中で、父は、国家権力が教育に関与することを許さないというかたちで、家永教科

書裁判がその頂点をなすものですが、多くの教育裁判に取り組みます。

日本教職員組合は1952年に出来ますが、父はその設立者のメンバーでした。そのモットーは教え子をつたたび戦場に送らない、というものでした。教育者が戦場に子どもたちを送ることに関わってはいけないという、戦後においては痛切な思いであったと思います。教職員組合のその後の動きを見ていると、私としては非常に疑問を持つものがありますけれども、当時の彼の意識においては、やはり日本の教職員がきちっと国家権力に対峙して、そして、日本の教育の中身を守らなくてはならないということ考えたものであったわけですね。

学力テストとか勤務評定とか次々に政府の教育政策が出てきます。今と非常に似たような状態なわけですけれども、教育の国家管理というものを強く意識した文部省の政策です。父はそれらに対抗するというで戦い続けたわけですね。

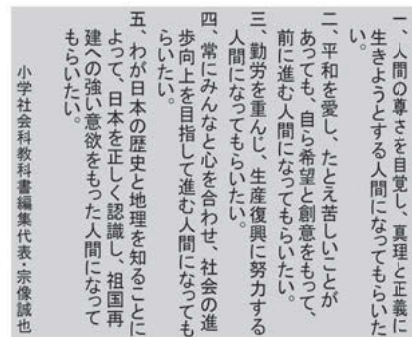
父は、基本的には教育とは人間の尊厳を確立することだ、人間の尊厳を確立するということを怠ったのが戦前の天皇制教育であったと考えます。「教育とは人間の尊厳を確立すること、教育の任務は人間の尊厳を心の中に打ち立てることである」と考え、そのために何をなすべきかを問い続けたということです。

明らかに今、「日本を取り戻す」と言う安倍政権の国家ビジョンには、彼の祖父にあたる岸信介の思想、国体に復帰しようとする保守本流につながるものだと思います。これは日本の民主主義の発展に実は根本的な弊害となるものです。自由民主党という名前とはうらはらのナショナリズムが陰に陽に現政権与党と日本の政治に戻ってきていることを私は非常に危惧するのですが、その感覚は、父、宗像誠也という人間に育てられたことが大きいと言えます。

## 民主主義教科書

彼は小学校の新制社会科教科書の編集に真剣に携わりました。まさに戦前の教科書がいかに誤りであったかを痛感した者として、民主主義教育の基本に優れた教科書がつくられるべきだという信念からみずからも執筆しました。この社会科には、父が望んだ日本の新しい社会像であり、家族像であり、地域社会と人々の暮らしが表わされています。今思うと、父が、私たち家族に望んだことがよくわかります。現実とは異なっていました。

この教科書の最後には、父が教師と親たちに語りかけたことばが載っています。



人間の尊厳を自覚し、真理と正義に生きようとする人間になってもらいたい。平和を愛し、たとえ苦しいことがあっても、自ら希望と創意をもって前に進む人間になってもらいたい。勤労を重んじ、生産復興に努力する人間になってもらいたい。常にみんなと心を合わせ、社会の進歩向上を目指して進む人間になってもらいたい。わが日本の歴史と地理を知ることによって、日本を正しく認識し、祖国再建への強い意欲を持った人間になってもらいたい。



The Munakata family in Mejiro, Tokyo, ca. 15

宗像誠也(一九〇八—一九七〇)  
 ・教育とは人間の尊厳を確立すること。  
 ・教育の任務は人間の尊厳を心の中に打ち立てること。

### 民主主義は家庭から

父の思想の中に「民主主義は家庭から」という信念があったのです。封建的家族制度から離れて家庭の中に真の対等な個人とかが相互に尊敬する人間関係をつくっていくこと、それが民主主義の根本だということです。

私はその中で3人の子供の末っ子として、多分に甘やかされて、育ちました。その焼け野原のバラック小屋でしたが、庭は広がったので、大きなツバキの木があったりして、そこにゴザを敷いてままごとと人形遊び、童話の世界に、明け暮れていました。ある意味で、良い住まいと家庭、良い暮らしということが好きな子どもでした。

父が私たちに最も大事なこととして教えたことは、日々の家庭での暮らしと生活において、家族としての責任、特に家事に責任を持つことです。当時我が家は、これも父の方針で、鶏やチャボなどを飼っていて、それを育てるのは兄と私の責任だったのですが、私たちはだいたいその命を奪って叱られました。この鶏の世話や、草むしり、冬のストーブの準備と掃除、皿洗いなど、家事の手伝いはうるさく言われました。宿題はいいわけには使えませんでした。

それからもう一つは、人を差別してはいけません。お手伝いさんにしても、御用聞きさんにしても、お客さんにしても、差別することなくきちっと対応しなさい。しゃべり方ひとつ、それから、

年上への敬意と、思いやりを持って人と接するというを日々、厳しく教えられました。私は恥ずかしがりではありましたが、次第に、弱者の立場を助けるという正義感と使命感の強い子になりました。小さな子だったのですが、学校の先生に、「おかしい、これはおかしい」とか、困っている友達を一生懸命助けるということはやってきました。そういう意味で、父の民主主義の教育を受け止めたと思います。

### 愛国者と非国民

父は日本の自然、草花を愛し、絵を描き、万葉歌を愛し、歌曲に長け自らも歌い、日本の文化と伝統に通じ、その多くを、愛した人間でしたが、晩年は特にさまざまな国家主義と国家の権力との闘いにあけくれ、61歳になったところでガンで倒れました。私はよく覚えているのですけれども、当時、進歩的文化人というのは保守右翼の敵でしたから、赤字で「非国民」と書きなぐったハガキがしばしば届くのを見ておりました。

父が学力テストの実施において、教育の現場で不正が行われているということを調べに愛媛、香川などに行っておりましたが、それを阻止しようとする自民党の教育関係者のヤクザまがいの行いで身の危険を感じたということも知っております。大げさではありますけれども、当時、日本の民主主義と、民主主義教育を打ち立てようとする努力は、命がけの部分があったと思います。日本社会は、国家と政府を批判すること、ないしはそれを調べ明らかにすることだけで、非国民になるのだということを日々知らされました。父ほど日本を、日本の文化を、愛した人間も少ないのに、です。

### 戦後日本の民主主義の草の根

私の育った、父母がいた、その目白の家には、戦後日本の民主主義の草の根の市民運動のはしり

がありました。「日本子どもを守る会」、「豊島子供を守る会」とか「日本母親大会」とか、時代に走り出した母親たち、女性たちの日々の活動の息吹きがありました。また学校の放課後の子供会や、PTAの活動、地域の先生方と父と学生たちとの定常的な勉強会も行われていました。

そのころ出始めた区議とか、地方自治体の政治へ、女性議員を送り出す、選挙運動までありました。羽仁説子とか、矢島せいこ、丸岡秀子、山家子和子、宮原貴美子とか、素晴らしい女性たちもしばしば我が家に訪れて来ていて、今思えば、市民活動の揺籃の場となっていたのです。いわばNPOの原点がありました。

#### 貧しさの光景

そういう光景が、私の幼少から思春期のバックグラウンドになるわけですが、もうひとつ私ののちの仕事の選択ということで影響を及ぼしたのは、ひとつの忘れられない光景です。父は大学の先生ですから、豊かとはいえませんが、私は目白というそこそこに恵まれた中産階級の住む地域に暮らしていました。父の方針で、地元の公立学校に通っていました。その中学校(今は統廃合でなくなりましたが)は、学習院を含めた山の手の住宅地と、その丘陵の下にひろがる高田馬場の住工混合地区との境界線上にありました。

ある日、私は先生に呼ばれて、「あなたが仲良くしているAさんのお母さんが亡くなったから、一緒にお葬式に行こう」と言われ、私は夕暮れに先生とその友達の家にてかけました。私はその時まで、木賃地帯と言われる木造賃貸住宅が工場や商店との間に立て混んでいる地域に行ったことがありませんでした。1950年代後半のことです。

その木賃住宅のひとつ、暗くてよくわからないとは言え、相当に古く汚いアパートの6畳間一間のところに友人と父親が住んでいました。廊下は電灯がないので暗くて、物がそこら中に置いて

あって足の踏み場もなく、食事時の料理のにおいてトイレのにおいまでが滲んでいるところで、急ごしらえの仏壇だけがありました。

私はそのときひどく衝撃を受けました。社会には暮らしの格差があるのだということ、貧しさというものを垣間見たのです。そしてもう一つショックであったことは、その親友がすごく冷たいきつい目で私を見たということ、私の甲冑を喜ぶどころか、決して許さないという鋭さに満ちた目であったことです。それは、彼女が自分の暮らしを知らせなくなかったのだらうと思いますし、許し難いというか、「なぜ来たのか」ということであったと思います。私は、「ああ、私は自分がおごり高ぶっていた」良い暮らしをしていて、それにまったく無神経であったのだなということがわかりました。これは私に大きな意味を持つ経験でした。

#### 住宅設計から都市計画、住宅政策へ

私は住宅をデザインするのが好きで、住宅をつくる、デザインを特に中学校ぐらいにはままごとの延長として、住宅の模型やプランを何十枚となく、山のように、描いていました。大学では、女子大の住居学科という住宅デザインのほうに向くわけですがけれども、向きながら、住宅というのはこういうデザインをしていても解決しないのだと、社会の住宅問題というのは解決しないということを常に考えていました。

そこから住宅設計にも関わりますが、ちょっと飛びますけれども、のちにアメリカを、見る機会がありまして、そこで建築計画から都市計画、デザインからプランニングということ、そして、プランニングから政策ということに進んでいくことになります。

1970年初頭にはアメリカのMIT、ハーバード近辺に、夫の留学にくっついていったのですけれども、そこで都市住宅の計画や研究の中に政策というものがあるのだということに気が付きます。

そこで政策への出会いがあって、それから、論文を書くにおいて計画と政策ということから書かなくてはいけないということ、デザインでは解決できない問題があるということの中で政策に関心が移ります。

建築デザインは今でも本当に好きですけども、デザインでは<本当の>問題、あらゆる人々が、ゆとりある、人間として人間にふさわしい、暮らしを営むということを解決できないという問題意識が明瞭になったのは1970年代のことです。それは中学の時友人の家を訪れて日本の住宅問題にめざめたときから政策への転換の道があったと思います。

また飛びますけれども、私は1970年代に考えたこと民主主義から住宅建築から政策へ。そして、次に1980年代にアメリカへ行ったときに、この時に本当の意味で、民主主義より適切な言葉としての、「アメリカン・デモクラシー」と出会うこととなります。

私の小さな個人史にもどり、信条とすることは、私の父方ではなくて母方の祖父からの言葉があります。この祖父は著明な仏教学者でしたが、彼が私の結婚式のときに、1970年すでに米寿をこえていたのですけれども、「日々これ学び続けよ。これからは男も女もない。日々学び続けよ」ということを私に言ってくれました。それが私にとっては重要な銘になりました。

そして、もうひとつの私の信条として、女性、女の子の平等、自由、それからデモクラシー、家族、愛、コミュニティ、社会、創造につながる筋道があります。女の子として、娘として、女性として、妻として、母として、より良き暮らしを求める権利ということを求めようとしてきました。豊かな暮らしと美しい住まいというものがどうつくれるか。美しい町がどうできるか、都市ができるか、国づくりまで、それは日本に限らず、世界の、特に途上国を含めた女性たちにまで思い

をはせながら、1日も休まず(?)2万4千日考えてきました!

もう一つ私の成人後の人生の足かけ3分の1は日本の地を離れてアメリカの東海岸に暮らしたことが大きな意味を持ちます。ことに私が長い年月をかけて1984年に東大でドクターを取ったあと、今度は夫の不惑を超えての最高学位の挑戦を支えようと、家族でアメリカに移ります。最初から移るつもりではなかったのですけれども、アメリカでの生活が長くなる覚悟はしておりました。そこで貧しい留学生家族として生活に格闘しつつ、そこで出会ったのが、ノンプロフィットということ、市民社会ということです。それをひとまとめにして、アメリカのデモクラシーと政策を学び続けることとなります。そしてそれが今の私を作りました。

最初の日本の生い立ちの中での民主主義というもの、それから、「ああ、おかしいな」と思った日本の国家主義というものの併存を抱えながら、では、アメリカはどうなっているのかということ、アメリカに移ってから、「アメリカ社会って何だ?」「民主主義って何だ?」と問い続けたのです。アメリカ帝国主義とかアメリカの悪口もたくさん言われながら、でも、アメリカが動いているというのは、これは何だろうかということを考えました。

二十数年アメリカで暮らす日々の学びの初歩として、毎日英字新聞を読んだのですが(読むように心掛けたのですが)英字紙を見ながら、そこに「democracy」という言葉がひんぱんにあるのに気付いたのです。必ずほとんどの新聞の中にデモクラシーという言葉が出てこない日がないということです。「デモクラシーというのは新聞のなかで、日々語られていることなのだ」ということを知ります。日本の新聞では、左翼系と言われる新聞でさえも、民主主義が「気楽に」取り上げられることはとても少なかったのですから。それが私の目を開かせることでした。

ノンプロフィットとアメリカ市民社会ということ

アメリカ社会ではデモクラシーとともに、実はアメリカ人自身、あまり気づいていないのですが、ノンプロフィット・セクターというものが根付いています。あなたたちも行くと思われるかもしれませんが、いろいろな助け合いの活動、フィランソロピー (philanthropy) と言われるような活動を支えている市民の動きがたくさんあるのです。日本ではNPOと称されるのですが、ノンプロフィット、非営利組織と言われます。

その時に、一番初めの頃に出会った言葉ですが、「自分の国を批判するとともに、これを慈しみ、心にかけてあげなければならない。自分の国の欠陥を直視するとともに、その長所を強化しなければならない。古ぼけたビジョンの持つ偽善性に気付くとともに、新しいビジョンづくりに手を貸すことをためらってはならない」。

そして「大まかな社会的合意をつくるのがいいだろう。それは多分、自由への希求、機会の平等、個人の価値と尊厳、公正と正義、そして友愛と夢」という言葉に出会います。これは『In Common Cause』という本を書いたガードナー (Gardner) という、ノンプロフィットの、ある意味でゴッドファーザーというか、つくり上げた、素晴らしい人間の言葉です。ここにノンプロフィットの精神の非常に重要なところがあります。そこで私はノンプロフィットというものにとり組むこととなります。

アメリカ社会の基本理念は前にのべたようにデモクラシーにあります。デモクラシーというのは永遠の行進過程です。マーチする過程です。プロセスです。デモクラシーには「こうこう、こうこう、こうあります」という究極な何かかたちがあるわけではないのです。特にチャーチルも言っていますけれども、デモクラシーというのは今まであったさまざまな統治のかたち、政府のかたちを除いたならば、最悪のものだと言うのです。

NPO、ノンプロフィット非営利活動組織というのは、そのデモクラシーを動かすアクターであり、担い手です。それは、個人の尊厳、自由、人権、表現の自由、多様な価値の尊重、多元的社会の創成、それから、権力の分散の促進、監視、自己更新と社会更新の担い手としてノンプロフィットがあるということなのです。

— 自分の国を批判するとともに、これを慈しみ、心にかけてあげなければならない。自分の国の欠陥を直視するとともに、その長所を強化しなければならない。古ぼけたビジョンの持つ偽善性に気付くとともに、新しいビジョンづくりに手を貸すことをためらってはならない。

— 大まかな社会的合意をつくるのがいいだろう。それは多分、自由への希求、機会の平等、個人の価値と尊厳、公正と正義、そして友愛と夢。

—In Common Cause, John. W. Gardner—

つい最近の『International Herald Tribune』の小さな記事にギリシャの民主化に触れて、デモクラシーというのは自転車乗りと同じだという著述がありました。自転車というのはこぎ続けなければ必ず倒れる。デモクラシーというのは、こぎ続け、考え続け、議論し続け、そして求め続けていかなければ必ず壊れてしまうものなのです。

それは、「デモクラシーの中にいる人々の、一人ひとりの責任なのです。一人ひとりが個人の尊厳とか自由、人権、表現の自由、あらゆる価値が尊重されるように一生懸命こぎ続け、議論し続けなくてはいけないのですよ」ということを言っているのです。デモクラシーとは何かというので、いろいろなことが書いてあります。いろいろなことが言われます。でも、非常に単純なことであるのです。ここに『DEMOCRACY IN BRIEF』というアメリカの国務省が出している小さな手帳があります。ここにとてもいいことが書いてあります。その基本は、ガバメント、政府、人々の、

“by the people, of the people, for the people.”とリンカーンが言ったのですけれども、人々の、人々による、人々のための政府を言うのですよと言っているのです。

この政府ですが、デモクラシーはその主権が人々に依拠する政府を言うのです。この人々の、人々による、人々のための政府を監視し、政府を改革するのは市民の責任です。政府をいかに賢くするか。我々にふさわしい、我々にディザブする、我々にとってのふさわしい政府をつくるのは我々の責任、市民の責任です。これを構成する、政府を支えていく国家体制は、政府と国民と領土からなります。その政府を良くし、そして国民がそれを支え、そういう政府を持つことができるのがデモクラシーですよ。そして、官僚がいくら優秀であろうとも、官僚とかエリートがいくら優秀であろうとも、彼らに政府を任せてはいけないうのだということを厳しく問う社会なわけです。

日本に限りませんが、憲法でデモクラシーをつくった、選挙制度をつくったとあって、あとは選挙のときに行こうか行くまいがかまわないということでは、民主的市民社会はできません。それぞれの持つ1票を行使し、それぞれの個人の自由を守り常に確かめつつ、チェックしながら、政府を監視しながら、政府を賢くしていくことが市民の責任なのです。そこに市民がいるのです。

### デモクラシーと政策

私は、1984年にアメリカに移ったさいに、いろいろな意味でアメリカに発展した「政策研究」をしたい、政策研究者というものを目指して政策研究をしたいと決意しました。そこから必死の思いでアーバン・インスティテュート(Urban Institute, UI)という、アメリカのトップ、世界のトップクラスのシンクタンクに入ることになりました。

ここで情けないことですが、日本の最高学位をとりながら、政策研究における無能力を徹底的

に知らされました。ただ、当時シンクタンク産業を書いた『アイデア・インダストリー』という本があるので、そこにMakiko Uenoはワシントンのシンクタンクに最初に雇用された日本人というふうに書かれていて、意地でもここで生き抜かなくてはとしがみついた20年余といえます。恥ずかしくて歴史をつくったなどとは言えないのですが、アーバン・インスティテュートに入ったことは私の人生にとって本当に幸運な遭遇でした。

UIに間もなくUIの20周年記念パーティーがあったのですが、その祝辞にカーラ・ヒルズ(Carla Hills, 元米国商務代表)が、「アーバン・インスティテュートが行う政策研究というのは、デモクラシーのプロセスへの偉大な貢献である」と言ったのです。シンクタンクが行う政策研究は、アメリカン・デモクラシーの必須の貢献であるということなのです。

私は、そうか、政策研究というのはデモクラシーへの貢献なのか。デモクラシーを動かすものなのか。政策というものがデモクラシーの非常に基本的なことなのだとということに目覚めて、やはりデモクラシーというものをちゃんと整えていくため、私がやるべき政策研究というのは意味があるのだということで、デモクラシーと政策とシンクタンクが密接につながります。

1991年にいろいろなことから、当時、日本財団の下にあった笹川平和財団に鈴木崇弘さんという人がいまして、彼が独立的シンクタンクというもの非常に重要だ、日本においてまったく欠けているものだとすることを早々と確信してシンクタンク・フォー・ジャパンというプロジェクトを立てます。1990年代初頭には日本は豊かで研究資金もたくさんあったのです。

独立シンクタンクを日本に：マクナマラの思い出

1991年ですが、日本にシンクタンクをというプロジェクトが立ち上がります。その時に、



私はロバート・S・マクナマラ(Robert Strange McNamara)という人間に出会うことになります。そのことは、今日配った紀要36号に「政策を学ぶ人に：ロバート・S・マクナマラの死去に寄せて」に書いています。

多くの皆さんにはなじみない名前と思いますが、悪名高きベトナム戦争の遂行者として批判された人間です。私は若き日にベトナム戦争反対のデモに参加した人間ですから、ジョンソン大統領とマクナマラのことは知っておりまして、ある意味で歴史上の人物に思いがけなく遭遇することになったわけです。彼は社会科学をベースとした政策形成ということを考えていた傑出した人物でした。

彼は、実は米国のシンクタンクというものの考え方、シンクタンクのゴッドファーザーと言われ、1990年代には米国の多くのトップシンクタンクの理事でした。

アーバン・インスティテュート(UI)の生みの親でもあったのです。というのは1960年代、アメリカはジョンソン大統領のもと、アメと鞭の政策といわれた、大型の福祉政策と、それからベトナム戦争の拡大を同時に行います。この福祉政策において公共住宅を中心とした大型の公共投資がなされます。それが結局、都市暴動の拠点となります。なぜ良きと思った社会政策、公共政策がそうした都市暴動に結果したのかを分析し評価すべきということで、ジョンソンの命を受けてマクナマラがつくったのがUIであったのです。

そこで、私はこのプロジェクトにマクナマラを主要なメンバーとして入ってもらうことにして、1991年11月にワシントンDCのUIで初めての会議を開きました。ブルッキングス研究所からライシャワー氏、カーネギー研究所のマッシュューズ女史などに当時の著名なワシントンのシンクタンクの方々に来てもらいました。

マクナマラ氏というのは威風堂々たる人間で、タッタッタと部屋に入ってきてすぐに、「Mr.

宮澤が総理になったということだね」「私が今そういう立場にいたら、すぐ電話をとって『宮澤総理、何はさておき、まずは明日にも五つほどシンクタンクをつくりなさい。話はそれからですよ』と言うよ」と言って、大声で笑ったのです。

その時私は「そうなんだ」、日本の、首相が、政府が、今やらなくてはいけないのは、本格的な(UIのような)シンクタンクをつくり、政策研究や政策評価をやることだという確信を得たのです。

その後、このプロジェクトは、神戸の阪神震災の年の2月に、大規模な世界シンクタンク・フォーラムを東京都心のホテルで開くことになりました。その時、マクナマラ氏も来てくれたのですけれども、その直前、「シンクタンクを日本にということはとても大事だけれども、私にはもう日本に行って、1週間もかかって1日のために来るのはもう限界だよ。とても嫌だよ」ということを会議の数か月前に言われました。

マクナマラ氏は「日本はいくらでも会議をやる。人を世界から呼ぶ。でも、何もその成果がないではないか。」と明瞭に言われたのです。日本を見事に表していると思いますけれども、そんな無駄はもうしたくないと。だから、これでシンクタンク・フォー・ジャパンというプロジェクトでは本当にやる気があるのかどうか、それをやれるのかどうか、それがはっきりしないかぎり行かないと言ったのです。

私は、アメリカ側で鈴木崇弘氏が日本側で、ホテルの大会議場をとって、世界中から著名シンクタンクの長を招待していたところでの発言でした。

その時、日本財団の笹川陽平氏が36億円を用意するから、この会議ではそれを使ってシンクタンクをつくるための提言をしてくれるようにと言われたのです。それをマクナマラ氏に伝えたところ、「少なくとも資金があるということであるなら、行こう」と来てくれることになりました。震災後であったこともあり、開催は最後まで難問だ

らけでしたが、マクナマラ氏と13の世界のトップシンクタンクの長を集めての会議が1995年2月東京で開かれました。

会議の結果は明らかに失敗でした。これはオフレコとします。

その会議が終わって、関係者全員が最後の昼食をしていたときでしたが、私たちスタッフが端のほうのテーブルにいて、マクナマラ氏ら主要客がメインテーブルにいたのですけれども、その最後のころにジャーナリストとのインタビューがあって早めに席を立ったマクナマラ氏は、ツカツカと私のところに来て、「I like what you said. Good luck.」と言ったのです。それは何のことかという、私は会議の末尾でほんのひとこと「日本の未熟な民主シーにとってシンクタンクをつくることは大事で、私はこのプロジェクトに情熱をかけている」と言ったことであるのです。それが「あなたの言ったことが気に入った。がんばれ、グッドラック」ということだったわけです。そしてまたサッサと出て行かれました。私もびっくりしましたけれども、周りの人たちがとてもびっくりしました。マクナマラ氏はこの会議の結果に対して明らかに批判されましたし、落胆されましたがその後もこのプロジェクトの展開を気遣ってくれました。

マクナマラ氏の思想は繰り返しますが、国家の統治の中で、その政策形成には、社会科学と十分な高い知識と情報データに基づいた、政策研究、分析、評価が不可欠であり、そうしたことができるシンクタンクを市民社会が持つ必要があるということにあります。政府を賢くする専門家集団がないかぎり日本の政治も社会も良くならないと。

そういうものをきちっとつくりなさいよと言われて続け、残念ながらそれに対して私は応えることができませんでした。民主シーというものを政策研究を通してそのプロセスに貢献したいと今もなお考えています。

## 民主シーと女性の権利

私は「民主シーに生きる」ということを、結局、私がいろいろなことをやってきたことは、As an Advocate of Democracy、民主シーの弁護者として唱道者として生きていくということであって、これからもそうあり続けたいと思っています。

それで、ちょっとこれは飛びますけれども、ヒラリー・クリントン、それから、アウン・サン・スー・チーの女性たち、私は民主シーをちゃんと追い続けるのは女たちだ、女たちがぶれることなく、民主シーを希求し続けることがとても大事だと思います。女性の、子供の、自由と人権の確立、その人間性と感情情緒にとって民主シーというのは不可欠の条件であるのです。

### 民主シーの原則

(produced by the Bureau of International Information Program,  
U.S. Department of State)

- |                        |                      |
|------------------------|----------------------|
| 1. 民主シーとは              | 12. 独立した司法府          |
| 2. 多数者の支配、個人の保護と少数者の権利 | 13. 合憲主義             |
| 3. 市民と軍の関係             | 14. 言論と表現の自由         |
| 4. 政党                  | 15. 政府のアカウントビ<br>ディー |
| 5. 市民の義務               | 16. 自由公平な選挙          |
| 6. 自由な報道               | 17. 宗教信仰の自由          |
| 7. 連邦主義                | 18. 女性と女子の権利         |
| 8. 法の支配                | 19. 連立・連携と譲歩・妥協      |
| 9. 人権                  | 20. 非政府組織の役割         |
| 10. 行政権                | 21. 教育と民主シー          |
| 11. 立法                 |                      |

ヒラリー・クリントンが2011年にミャンマーに行ってノーベル平和賞受賞者のアウン・サン・スー・チーと話したとき、「If we go forward together, I am confident that there will be no turning back from the road toward democracy.」、世界の民主シーに向かっていく道は、もし私たちが一緒に手を組んでいくなれば、決して後戻りしないのです、といったことは記憶されなければなりません。

## 日本の改革：予算の民主化

もう一つこれは簡単に言いますと、私は政策研究と民主シーという意味で、本格的なシンク

タンクの設立を主張してきましたが、実は日本の改革には今一番必要なことは、国家予算分析局を創出するという事です。(配布資料参照「日本の予算議論と政策決定に欠けるもの」総合政策学部紀要41号)シンクタンクを造る前にやらなくてはならないことがあるのだということに気が付いたのです。それはすなわち政策研究と政策分析、政策評価を生産する産業のもととなる組織です。それが出来る政策研究者と政策アナリストの必要です。そういう研究と政策分析という知見が政策形成の基盤になくはならず、政策決定に反映されていくこと。仲の良い大蔵省の役人だった人間が私に、「政策研究なんて要らない。僕たちトップの役人が、鉛筆をなめながら3日3晩ほど考えればできるものだよ」と10年前ほどに言いました。優秀な日本の官僚がやればできると。

その時代は終わりました。政策の形成と分析評価は、高度な知を結集する必要があり、それは組織的な対応が必要です。個々の学者とか学識経験者が集まって何回かの審議会で出来る話ではないのです。

日本に国会予算分析局を  
一予算の民主化の必要性—  
官僚がいくら優秀であっても  
政策形成を彼らだけに任せてはならない。

- 予算形成の複雑化、困難の増加
- 高令化、少子化、温暖化、グローバルゼーション
- 政府の複雑多様な政策手法の増大
- 予算の技術は容易ならざるもの
- 行政官僚機構の閉鎖性の増大、議論回避、アカウンタビリティーの劣化、議会の影響力の低下

これは予算の民主化(democratization of budget)ということ事です。予算政策を民主化すること、人々に関心を持ち、関わり、合意を形成してこそ、国家財政のコントロール、ガバナンスが可能となるのです。どの国も大変ではありますが、あらゆる国でこの予算政策形成の民主化に真剣に取

り組む必要があります。

予算形成は非常に複雑化し、予測や分析も複雑困難になっています。ただ、一方IT革命によって政策データと情報は容易に処理できるようになりました。それも組織として取り組むべきことです。その組織としての経験と政策の蓄積が継承されていかなければ、政策の進歩と成長はありません。突如として政権交代で「前の政権が決めたことは知らない」ということで政策が決められるのでは、日本の財政問題は解決されるはずはないのです。

予算民主化のための予算改革がなされなければならないのですが、改革の核心にあたるものが一つの組織：議会予算局(Congressional Budget Office : CBO)であるといえます。議会制国家では国会予算局(Parliamentary Budget Office : PBO)と呼ばれています。米国のCBOがモデルです。韓国にも10年前に作られています。OECDは近年CBOの創設を勧めています。CBOを作り、オープンな予算議論ができるようにすることが民主国家にとって大事です。政策分析をする、非党派性、独立性を持ち、信頼できる正直な数値(honest number)を提示できる専門家集団からなる組織が必要だと言っているのです。

今回の原発の問題を人災という部分で考えると、日本のデモクラシーの基本的な欠陥から引き起こされた問題であると考えます。高木仁三郎という核物理の専門家であり、運動家が10年以上前に日本の原子力産業を評して、「議論なし、批判なし、思想なし、ここに原子力文化がある」と言っています。科学的な、専門的な研究と分析が、人々に提示されて、それをもって人々が議論できること、市民が問題を理解し、その選択に関わること、それが民主主義であることの原点です。日本は自己検証する力を持っていない。それは原子力文化に限りません。日本の政策文化がまさに議論なし、批判なし、思想なし、自己検証力

なし。そして、人々の中に公、パブリックということの考え方もない。

それで、ひとつの突破口として、私は国家予算分析局をつくりたいと10年ほど前から提案してきました。これまでかありませんでしたが、最後にこれを運動にできないかと思っています。私としては、疲れて非力でもあるのですが、なんとか若い方たちに受け継いでいただきたいことです。

## II. 世界市民に

私は世界市民という考え方を関学が掲げたということは極めて時宜にかなう、重要なことだと思います。確かに今、世界はグローバルにつながっています。その時に偏狭なナショナリズムでもって行動することはとても危険なのです。これは安倍政権にというか、新たな自民党政権、民主党もそうだと思いますけれども、政権の動きを見ながら思うことです。(安倍首相が私は再生した、日本も再生する、日本は戻ってくるといわれたのには、愕然とします。)

今から思えば20年前にも、日本の国際化の必要性が叫ばれました。当時元駐日米大使であったエドウィン・ライシャワーは、日本の特に若者の内向き志向に警鐘を鳴らし、日本人の世界市民意識の醸成を提示しています。日本の防衛の真の最前線は、軍事ではなく、健全な国際協力の維持と発展にあり、国際教育を語学教育と同時に進めていかなくてはならないとしています。

### 世界の課題に目を向けること

私は今、世界市民としての基本認識として世界の人口動向と都市化の問題を挙げておきます。

輝く未来を創造する世界市民たれ  
都市こそ鍵：  
世界の都市に夢あり、仕事あり

世界の課題  
Population 人口問題  
Urbanization 都市化  
Poverty, Environment &  
Economic Growth  
貧困、環境劣化、経済成長

国家主義、ナショナリズムというのはその中にいる人間にとってはとても心地よい、カンファタブルなものです。日本の文化は特有で、日本の精神は純粹で血統正しく、良い文化だといって守っていれば、穏やかで楽しいものです。価値観の相克もなく、安全安心な国です。

しかし今のグローバルな社会に日本だけが国を閉ざしているわけにはいきません。それは自らを脆弱にする危険性を持っています。ナショナリズムはデモクラシーという大きな流れの基本にある、多様性の許容、多様な価値を認めていくということと抵触します。

戦後日本の自民党政権が、延々と日本復活と再生のために行ってきた、日の丸、国旗掲揚、国歌斉唱、元号の制度化そして道徳教育の復興は、まさにナショナリズムの整備であるのです。私はいま戦争を知らない私たち以降の世代の、若い人がスポーツやオリンピックに日章旗や旭日旗を無邪気に掲げていることに私は非常に危惧するところがあります。

それは、戦前の歴史を知らない、戦前の歴史の中でナショナリズムというのがどういう役割を果たしているのかということをはほとんど知らない、知らされていない世代が、日本の人口の8割近くとなる。政権の中枢に、「私が生まれていなかった時の戦争の責任をとる必要はない」と明言する政治家がおり、一方、中国や韓国など、歴史を忘れないという教育をしている、侵略されたアジアの国々と人々がいるということの、大きな落差が

いつまた大きな問題を起こすか、非常に問題であるのです。「ああ、また古き日本が復活するのだな」と思われるのです。それが尖閣の問題につながり、さまざまな問題を引き起こしていこうと思えます。戦争責任というものを明瞭にせず、うやむやにしたままでゆくと、実は世界市民としての資格は少々もろいと思えます。

世界市民とは、大きな意味でのグローバルな市民社会の創出に寄与するものであることです。これは国際機関に働くことではなく、もちろんそれも一つではありますが、あらゆる場と機会、NPO/NGOを通じて、政府援助に限らず、民間の力において、環境問題、貧困問題、経済成長、安全保障、平和、紛争解決、様々な地域からグローバルにつながる問題に対して、貢献していくことがこれからの市民の役割であり責任です。

#### モンゴル研修旅行を通して

関学での8年間、初年度を除いて、合わせて8回ほどモンゴル研修旅行を行ってきました。先日も、東北を知らない人間が1ヵ月に一度ぐらい行ってそれが被災者にとって何になるのだろうかという批判がありましたが、モンゴル研修も、何も知らない学生がモンゴルに10日ほど行くことにどんな意味があるだろうかと悩むことが多々ありました。(これも紀要近刊42号「モンゴル研修旅行を終えるにあたって」を読んでください。)その悩みをモンゴルの友人に話した時、「ひとりでもモンゴルに来てくれる人があればそれでいいのです。そして彼・彼女が、いつかモンゴルを思いだし、また訪ねてくれるなら、忘れないでくれるなら、それだけで十分素晴らしいことです。」とこたえてくれました。

今、関学が掲げたモットー：世界市民の育成は、我田引水ながら、モンゴル研修旅行において大いに達成してきたと思えます。今私のゼミの学生たちは、グローバルな視野を持って、でも地道

に足元を確かめつつ歩んでいます。

「地球儀を心に」という私が願ったかったことは、日本を愛するのはよきことでありながら、日本の特有さに甘んじた愛国心にとらわれてはいけないということにあります。多様な価値観があるということを知りたい時に学んでほしい、外に行ってほしい、その契機を与えることにありました。

私たち、それこそ幼児期に深刻な戦争経験のない人間としては、やはり貧しさとか貧困とかというのが肌身で理解できないということがあります。私にもわからないです。私はもちろん貧しい東京の町は見ていますけれども、それでも、私たちの兄、姉とか父、母の受けた戦争の苦しみ、戦争時の貧しさとか恐怖を知らないのです。そうした私には戦後の日本の姿の一端が途上国の中に見えるように思いました。それが、学生に見てもらいたかったものです。

そして、多様な価値観があることを学べて、日本を離れることによって日本を知ること、そして、偏狭なるナショナリズムを超えてほしいということが願いでモンゴルに行き続けてもらったのです。上野先生は、モンゴルだけ行っているけれど、なぜモンゴルなのだろうと思っていたでしょう。私はそこに行くことだけでも意味があるのではないかと思いついて皆に行ってもらいました。

面白いことに、モンゴルはいま非常に大きな変革の時代を送っています。それを見るチャンスができたという意味で、引っ張って行って、付いてきてくれた学生たちには本当に感謝したいと思います。モンゴルは小国でありながら、これから世界の資源地図と政治地図においても重要な意味を持ちます。私は今そのことが見えてきている、数十人のゼミ卒業生を送り出していることを、心強く、かつ誇りとします。

最後に私はコミットメントということに触れた

と思います。何にコミットしていくか。ちゃんとコミットしようよ。砂のようにさらさらと生きるのやめようよ、と。もしかすると今の日本は、そしてあなたたち若い人は、何も決定的に欠落するものがない、すべてが適度に満たされた豊かな社会で、何も引っ掛かりとげとげすることのない人生を送れるかもしれません。

ただ何かにコミットすることによって、自分自身も、社会も見えるものがあるということが言えるからです。

世界市民というのは小さくともいかにローカルであるように見えようとも、コミットすることができる人間だと思います。私は、それこそいろいろな思いもあって、アメリカン・シチズンシップというものを取ってアメリカ市民となりました。私は、世界市民がどういう国籍を持つといいかと考えるのですが、今のところ、私がコミットすることにおいては、日本国籍より米国籍の方が良いように思っています。

それを含めて、コミットメント、献身すること、参加すること、関与すること、責任を持つことが大事だと。私の小さいときの父、母から教えられたということも、コミットしてください。あなたの家事、家庭というものにコミットしなさいよ、責任を持ちなさいよということからスタートしたと思いますけれども、そういうコミットすること、それは思いやりと愛とにつながるものだと思います。

いま私は国会の改革を助けるということでコミットしたいと思って一生懸命論文も書いたのですが、加えて今までやってきたものに関して言えば、モンゴルの市民社会とデモクラシーの成長を助けるということが私の課題になってきています。

皆と行き続けて7年、年に1回で1週間か10日のことですが、その中で、私は「モンゴルが必要としていることは何か」と、モンゴルの人々

が願っていること、モンゴルが考えなくてはいけないことが何か少しわかってきました。それは都市問題でもありますし、住宅問題の解決でもあります。そのベースに、モンゴルの市民社会がデモクラシーというものの中でどう育つかということにいま向き合っているところにあります。

私は3.11以降に関してはあまり大きなことも言えないのですが、私は私ができることということでは、私は1人でも友達になれて、何か助けられればいいのではないかというかたちの小さなコミットメントを、長峯純一先生が切り開いているコミットメントの一部にかかわらせてもらってきました。

私は本当に体も強くないし、あまりガレキ処理もできないのですが、行き続ける中で、何人かの人と話し合っ、おばちゃんたちと話し込んで「先生、また来てちょうだいよ、待っているからね」と言われるようになりました。ここで私なりにやれることは一人でも知り合い、少しでも「忘れない」つながりを持ち続けることだと考えています。いろいろなコミットの仕方があると思いますけれども、小さくとも私のできる限りにおいて、ひとりを助けられたら、そしてもしかしたら社会の変革にも、コミットメントを続けていきたいというのが私の願いです。

ここで、エマニュエル・レヴィナス(Emanuel Levinas)という哲学者の言葉『私が先んじて罪を負う』という『私』の名乗りだけが、世界を人間の住むことのできる場所につくり上げることができる。そして、世界を人間の住むことのできる場所につくり上げるのは、神の仕事ではなくて人間の仕事なのです』を最後に贈ります。

私は罪を負うというほどのことはできないけれども、コミットメントという意味では、私のできることで1人でも助けることができるか、一つでも社会の改革につながるができるかということ

を人生の中で問い続け、やり続けてきたつもりで  
すし、今後もやるつもりでいるということです。

でも、世界のどこかで、お会いしましょう。どう  
もありがとうございました。

Emanuel Levinas (1906-1995)

「私が先んじて罪を負う」という「私」の名  
乗りだけが、世界を人間の住むことので  
きる場所に作り上げることが出来る。

そして世界を人間の住むことのできる場  
所に作り上げるのは、神の仕事ではなく  
て、人間の仕事なのである。

ちょっと見えないかもしれませんが、実  
はここに、地球儀の周りに豚が飛んでいるので  
すが、私はこのカードが気に入っているのです。私  
は娘からつけられたあだ名が「ピッグのピーチャ  
ン」というのです。とても豚に似ているからなの  
ですけれども、「飛ばない豚は豚ではない」という  
のは宮崎駿の映画でしたが、私は豚として誇りを  
持って地球の周りを回っていこうと思っていま  
す。これからのことですが、夫のいる名古屋に日  
本の居所を作り、ワシントンの自宅に本拠地を、  
そしてモンゴルにも行き場をつくって、体力が持  
つ限りこの3ヶ所3か国を主に飛びまわろうと思っ  
ています。グローバル・シニア・シチズン、高齢  
世界市民として、少しでも何かを変えることがで  
きるか、楽しみつつ次の人生に挑戦してみます。

私は、関学の総政には8年しかいなかったので、  
何が貢献できたかはわからないですけれども、私  
としてうれしかったことは、私の思いを受け止め  
てくれたとても多くの学生がいて、いま彼らが悩  
みながらもそこから何かを、社会に貢献していこ  
うと考えてくれて、そして世界を学び、どこかを  
良くするために、考え行動する若者を、少なから  
ず生み出すことができたということ、それが私に  
とってここでの教育の誇りでもあり最大の喜びで  
あり、「リウォード」報いです。これからも、いつ